

(揖宿郡額娃町上別府字北手牧)

位置と環境

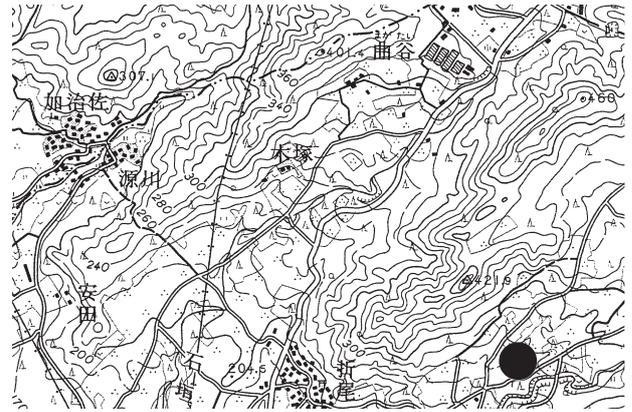
遺跡は額娃町上別府北手牧に所在する。額娃町は薩摩半島の南端に位置しており、東は指宿市と開聞町、北は喜入町と知覧町、西は知覧町と境を接し、南は東シナ海に面している。遺跡は額娃町の北部に位置しており、北東部には唐牧岳等の旧期火山が連なっている。馬渡川の上流が兵児岳の裾に迫ってくる地点の緩やかな傾斜地で、折尾集落から新牧集落に通じる道路途中の標高280mの台地上に位置している。

調査の経緯

額娃町が郷土史編集事業に伴って、額娃町教育委員会が調査主体となり、河野治雄・河口貞徳が調査を担当して、昭和43年の春夏2回にわたって確認調査を実施した(第2図)。第1次調査は昭和43年3月25日から31日の期間で5箇所の特レンチを設定(約74m²)して調査を実施し、第2次調査は昭和43年7月26日から8月3日までの期間で3箇所の特レンチを設定(約48m²)して調査を実施した。

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代早期・前期・中期の遺物や遺構が発見された。縄文時代早期の遺物には、石坂式の土器が出土した。縄文時代前期の遺物は、轟

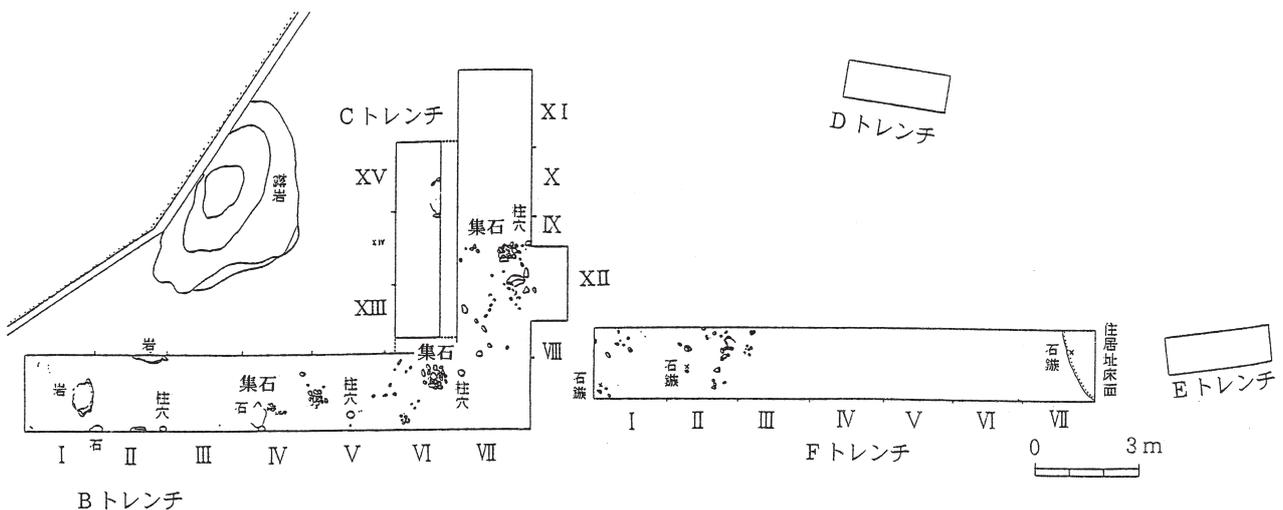


第1図 北手牧遺跡の位置

式・曾畑式等の土器が出土した。縄文時代中期の遺物には、深浦式・春日式・阿高式・岩崎式(上層)の土器が出土した。

昭和43年の第1次調査では5箇所の特レンチ(A～E特レンチ)を設定し調査を進めた。第2層の黒褐色粘質層と第3層の褐色粘質層からは縄文時代前期から中期にかけての土器が多く出土した(第3図1～10)。B特レンチ第3層からは、口縁上部が内側に湾曲し頸部でくびれを持ったキャリパー形の春日式土器(第3図9・10)が出土している。B特レンチ、C特レンチからは、石鏃を含む石鏃が60本を超える程大量に出土(第3図11～21)しており、それらは土器形式を伴って出土している。

遺構としては、B特レンチから縄文時代中期の深浦式の時期の集石3基が竪穴住居と思われる柱穴と



第2図 北手牧遺跡跡トレンチ配置図及び遺物出土・遺構検出状況図

ともに検出された（第2図）。集石に掘り込みはみられないが礫は火熱を受けたように赤く焼けていたり、焼き割れていたりしており、石蒸し炉の跡と思われる。

昭和43年の第2次調査では第1次調査の結果をふまえて3箇所（F～Hトレンチ）のトレンチを設定し、調査が進められた。Fトレンチの第5層の暗褐色粘質層から竪穴住居跡の床面と思われる落ち込みが検出され、その面に土器片と石鏃が出土した。また、Hトレンチからも柱穴が検出されている。

特徴

本遺跡において特筆すべきことは、縄文時代中期の春日式土器が出土したことで、北手牧タイプの春日式土器として貴重な発見であった。

また、春日式土器を上層に、枕崎市深浦遺跡の土

器を標識とする深浦式土器を下層に出土して、両者の前後関係が明らかになった。

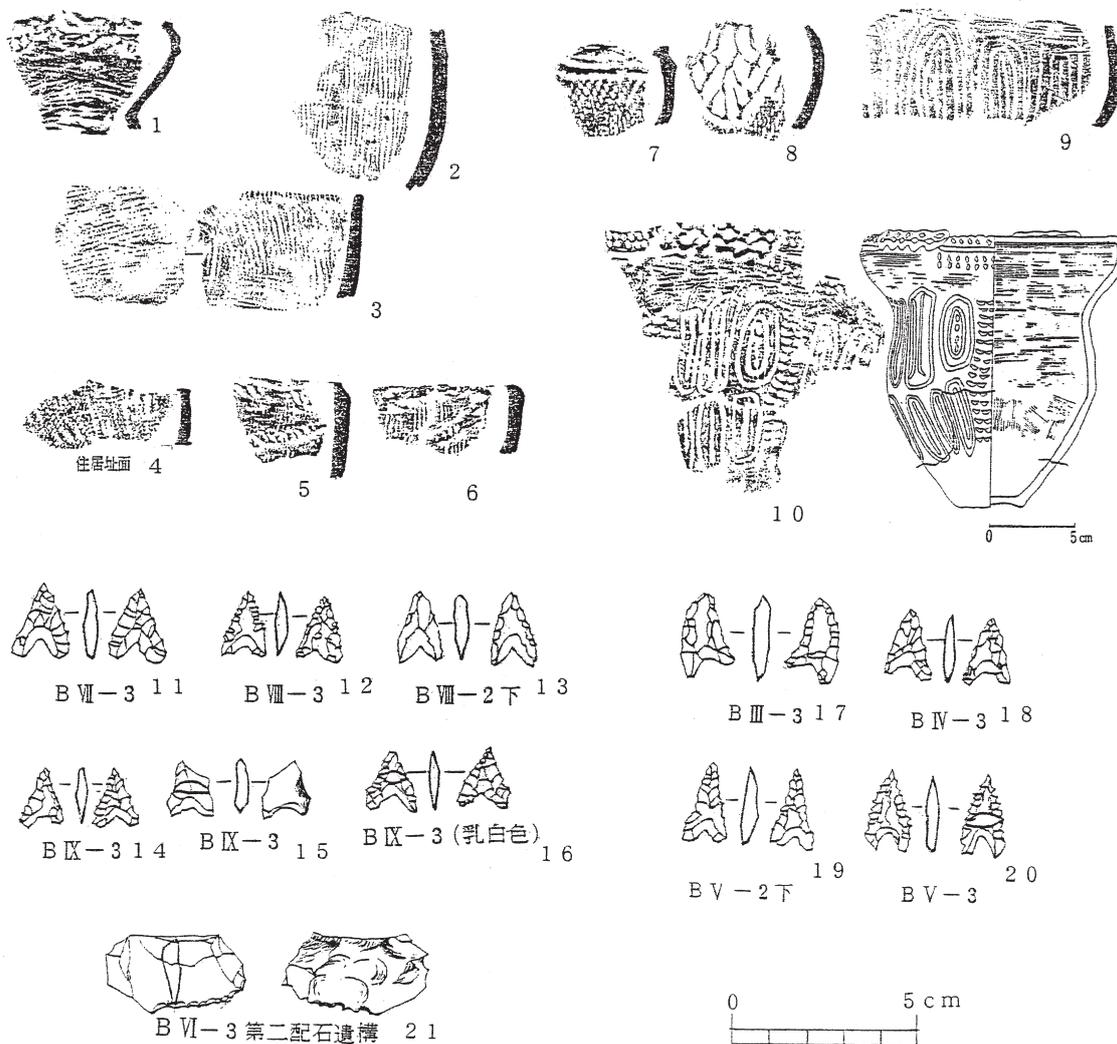
資料の所在

出土した遺物は、穎娃町歴史民俗資料館に保管・展示されている。

参考文献

穎娃町1990『穎娃町郷土誌（改訂版）』
 河口貞徳1998「鹿児島」『日本の古代遺跡』38保育社
 穎娃町教育委員会1990「城ヶ崎遺跡」『穎娃町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

（朝隈兼典）



第3図 出土遺物